

カント倫理学と理念の問題 : 学と智の統一点を求めて

著者	宮村 悠介
学位授与年月日	2014-02-20
URL	http://doi.org/10.15083/00006513

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 宮村悠介

本論文は、カントの哲学的倫理学における実践的理念の内実と位置づけの検討を通じ、カント倫理学の学問性の問題を考察しようとするものである。それぞれが二章からなる三部構成で、第一部の二章で影響史・発展史の観点からカントの理念論の背景を明らかにし、第二部と第三部の四つの章で、哲学と知恵、倫理学と徳、政治哲学と理想国、宗教哲学と人格的理想という、カントの実践哲学における四組の「学と理念」の連関を問題とする。

まず第一章では、影響史の観点から、プラトン哲学とそのイデア論についてのカントの理解と発想の源泉が問題とされている。その主要な源泉として、ブルッカー『批判的哲学史』、ライプニッツ『人間知性新論』、マルブランシュ『真理探究論』の三冊の文献が取り上げられ、それぞれのカントへの影響の可能性と様態が検討されている。続く第二章では、発展史の観点から、カントがイデア論を受容した1770年の教授就任論文の前後の時期が、それ以前の約十年間と『純粹理性批判』に至るその後の約十年間の思想の歩みのなかに位置づけられ、カントの倫理学説の展開におけるイデア論の受容の意味が考察されている。

こうした考察を踏まえ、第二部では、「哲学を学ぶことはできるか」と「徳は教えられうるか」という哲学・倫理学の学問性の根幹に関わる問いへのカントの答えの意味を再検討すべく、カントの哲学・倫理学における知恵と徳の理念の内実と位置づけが検討されている。ソクラテス・プラトンの伝統を引き継ぎつつ、カントが知恵や徳の理念に、哲学・倫理学の学問性・客観性を支えるとともに、自己のあり方を照らし人間の生き方を導く主体的な拠り所を求めていたことが、第二部の二つの章のそれぞれの結論となっている。

最後の第三部の二つの章では、政治哲学や宗教哲学をも含むカントの広義の実践哲学における、理念の意義と位置づけが問題とされている。氏によれば、カントは狭義の哲学・倫理学だけでなく、政治哲学や宗教哲学においても、理念を通じて自己と世界の現実を見据えるという哲学者としての態度を崩していない。第三部はそうしたカントの哲学者としてのスタンスを、主にカントの晩年の作品に依拠しながら明らかにしようとしている。

本論文は、以上のような考察を通じ、徳や知恵や理想国や人格的理想といった実践的な意義を持つ理念が、カント哲学的倫理学において、客観的な「学」と主体的な「智」の統一という、ソクラテス・プラトン以来の哲学の根源的な課題に応えるための重要な基盤であった、という結論に至っている。本論文は、個々の論点にはなお展開を要し、補完を必要とする部分も残しているとはいえ、一方ではカント研究の新たな礎を築き、他方で倫理学研究それ自体に対する、着実で、正統的な視角を提起するものである。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。